

江東の掘割・川 ⑥

江戸近郊農漁村の掘割 - 生業の場、ハナシの舞台として - 江東区深川江戸資料館



地図の東(右)側が江戸の近郊農漁村、砂村地域で、新田が広がっているのがわかります。西側の深川はまだ木置場となっています。寺院の移転状況から万治元年(1658)以後、天和2年(1682)以前の地図と推測されます。地図上には本文中で取り上げている掘割の名称を示しました。この地図以降に開削された掘割もあります。地図のほぼ中央には「ヤキ場」の文字がありますが、この辺りが『東海道四谷怪談』の舞台となった隠亡堀と思われます。町場として発展していく深川と田園地帯とのちょうど中間に位置していることがわかります。
*『深川総画図』(館蔵/久染健夫「深川江戸資料館所蔵 江東区の地図類について」『江東区文化財研究紀要』第15号をもとに加工しました。)

今回は、現在の江東区南東部、砂村地域の掘割を取り上げます。砂村地域は、新田開発のために埋め立てられた江戸近郊の農漁村です。掘割も農業や漁業のために開削されました。それらの掘割は、江戸を中心とした流通網である小名木川や大横川などとは少し役割が異なっていたわけです。そして、新田の中を流れる掘割は、深川のような町方よりは、のどかで閑散とした雰囲気だったことでしょう。なかには『東海道四谷怪談』の舞台となった場所もありました。

(1) 江戸の近郊農村と境川

境川は小名木川から分岐して中川に注いでいました。現在の清洲橋通りがほぼその川筋に一致します。小名木川の分流であることから裏川、また砂村川とも呼ばれました。

砂村新田の埋立て開発は万治2年(1659)にはじまりましたが、境川もそれらの新田開発とともに整備されました。砂村のほぼ中央を流れ、北方にあたる中田

新田・大塚新田と南方の砂村新田・八郎右衛門新田の境であったことからその名前がつけられました。支流の舟入川・西横堀・東横堀とともに、沿岸の田畑の農業用水の水源・排水や物資を運搬する舟の水路として重要な役割を果たし、当地域にとって欠かせない水路となりました。

当地の農業は、これらの水路を利用することにより促成栽培などを取り入れ、江戸東京の近郊農村として発展していきました。例えば、促成栽培には、苗を育てるため、江戸の町方から排出されるゴミや堆肥が必要ですが、掘割は、ゴミや堆肥を集めたり運搬したりするためのゴミ舟や肥舟の水路になっていました。こうした江戸近郊という立地や掘割を生かして栽培された茄子や胡瓜・白瓜、その他、葱・つけ菜・蓮などは当地域の名産となりました。

(2) 身近な漁場、舟係留の場として

現在の北砂から東砂のあたりは、近郊農業と近海漁業の兼業農家が多くありました。境川から南流している舟入川は、農業だけでなく明治以降の海苔養殖を支えた川でもありました。江戸・東京の海苔と言えば、

普通浅草海苔と思われがちですが、浅草で海苔がとれたのは元禄(1688~1704)の頃までで、その後は品川・深川・砂村・浦安の海苔でした。砂村(砂町)の海苔は高級品とされ、市場でも高く売れました。舟入川沿いの両岸に建ち並ぶ民家は、海苔養殖を営む家の割合が多く、ベカ舟と呼ばれる小型舟を所有し舟入川に係留していました。

海苔養殖以外に、金魚や鰻・鯉・亀の養殖も盛んに行なわれました。また、農業の合間に、客を乗せて東京湾で魚を獲り、舟上で食事をさせるなどの商売を行なう人もいました。舟も掘割も多目的に有効利用されていたわけです。

(3)『東海道四谷怪談』「砂村おんぼうぼり隠亡堀の場」

鶴屋南北つるやなんぼく作『東海道四谷怪談』は、実在の場所や当時江戸の町で話題になっていたいくつかの実話をもとに創作されています。第三幕「砂村隠亡堀の場」は、境川(現在の清洲橋通り)と横十間川の交差する辺りにあった掘割が舞台になっています。現在は、清洲橋通りが横十間川を横切るところにお岩さんに因んで岩井橋と呼ばれる小さな橋が架かっています。作品の中では、この隠亡堀と呼ばれた掘割に、戸板こに括り付けられたお岩さんと小仏小平が流れつくことになっています。

隠亡とは火葬に従事する人のことです。隠亡堀は実在の掘割で、火葬場がそばにあったため、そのように呼ばれていたようです。地誌には次のように記されています。

▼『江戸砂子』きくおかてんりょう 菊岡沾涼著・1732年(享保17)

○隠坊堀 炮烙新田、龕堂あるゆへに俗に呼ぶ名也。又やきば堀とも。(六 深川 本所 隅田川)

▼『新編武蔵(国)風土記稿』・1828年(文政11)

阿弥陀堂 極楽寺と唱ふ、茶毘所なり、世俗こゝを砂村のおんぼうと呼びいつしか此辺地名の如くなれり、深川正源寺の持、(卷之二十五・葛飾郡之六)

当時の火葬場は、近代化された現在の火葬場とは様相が違っていました。例として『遊歴雑記』ゆうれきざつき (十方庵大浄敬順著、1814年・文化11)の記述を紹介します。

(略)又境内の末に人焼場などありて隠亡といふものは業とす。左はいへ南隣には浄真寺の焼場ありて、夜な〜門外を通行するものは、風に随ひて悪臭いふべからず、人みな鼻を覆ふ(「深川靈巖寺拾八段檀林の事実」)

江戸時代の寺院は、名所とされるような荘厳な雰囲気の中に、こうした火葬場も備える場所でもありました。また、この辺りは、新田開発や町場化が進む一方で、火葬場もある寂しい土地でもあり、江戸からみると都

市と農村の間のようなところだったのです。

そして、この隠亡堀の場面は、下記のような話を下地にしたと言われています。

○当時、山の手辺に住む、ある旗本の妾が、ちゆうげん 中間と通じて露見し、男女は一枚の戸板に釘づけにされ、なぶり殺しにされて、神田川に流された話。

○砂村の隠亡堀に、固く身体を結び合った心中者の死骸が流れ着き、それを鰻かきが発見して、大騒ぎになった話。(河竹繁俊校訂『東海道四谷怪談』1956年・岩波書店)。

隠亡堀に限らず、当時の掘割は、俗にドザエモンと呼ばれる水死体が発見されたり、カッパなどの伝承が話題にされたりする場所でした。

鶴屋南北の『東海道四谷怪談』は、寺院や火葬場、掘割といった江東地域の特徴やそれらにまつわるハナシを巧みに取り入れることで、江戸の町の文化や人間の心情を表現した作品だったと言えます。

境川は昭和3年(1928)、舟入川は昭和15年(1940)に埋立てられましたが、一部は親水公園として再生しています。江戸近郊の農漁村は住宅地・工場地として、その姿を急速に変えていきました。

*本文中には差別的表現と受け取れる用語が含まれていますが、ここでは学術的な立場からの見解を述べるために引用・使用しています。



『中村座 狂言番附』(文政十亥年九月)(河竹繁俊校訂『東海道四谷怪談』)



岩井橋(現在写真)